

山陰海岸ジオパークに関する活動報告

研究員 新 名 阿津子

1. はじめに

2010年10月3日（現地時間）、山陰海岸ジオパーク（以下、山陰海岸）は、ギリシャのレスボス島で開かれた世界ジオパークネットワーク（Global Geoparks Network、以下、GGN）¹会議において、GGNへの加盟が認定された。同会議では、カナダのStonehammer Geoparkが北米で初めてのGGN認定ジオパークとなり、アジア地域では山陰海岸や中国以外にも、韓国の済州島ジオパーク²やベトナムのDong Van Karst Plateau Geoparkが認定を受けた。

2010年10月時点の国・地域別に見たGGN加盟ジオパークの分布では、ヨーロッパ（42か所）が最も多く、次いで中国（24か所）、日本（4か所）となっている。その他、イランのケシムジオパーク（2005年）、ブラジルのアラリペジオパーク（2006年）などが認定を受けており、ヨーロッパおよび中国が中心となって推進してきたGGNは世界各地へと拡大している。

一方、日本のジオパーク組織である日本ジオパークネットワーク（Japan Geoparks Network、以下JGN）においても、徐々にその加盟数が増加している。2010年9月時点で14か所がJGN加盟しており、そのうち4か所（洞爺湖・有珠山、糸魚川、島原半島、山陰海岸）がGGN認定ジオパークである。このほかにも、準会員3か所、オブザーバー12か所の計15か所が存在する。JGNもGGN同様に加盟審査があり、その審査に合格した地域がJGN認定のジオパークとなる³。

さて、(財)とっとり地域連携・総合研究センター

では、2009年12月より、山陰海岸の活用に関する調査研究を進めてきた。また2010年度からは、行政や大学などの関係機関や地域と共に、ジオパークにおける拠点開発や活動支援を行ってきた。そこで、本稿では山陰海岸ジオパークを概観したのち、扇の山エリアで活動する扇の里グループと、鳥取砂丘エリアで活動する湖山池情報プラザととっとり観光ガイド友の会について報告する。

2. 山陰海岸ジオパークの概要

2.1 山陰海岸ジオパークの概観

「日本海形成に伴う多様な地形・地質・風土と人々の暮らし」をテーマとする山陰海岸は、東西約110km、南北最大30kmの3府県6市町（京都府京丹後市、兵庫県豊岡市・香美町・新温泉町、鳥取県岩美町・鳥取市東部）で構成されるジオパークである（図1）。主要なジオサイトには立岩、琴引き浜（京丹後市）、玄武洞（豊岡市）、香住海岸、足跡化石、鎧の袖、猿尾滝（香美町）、但馬御火浦（新温泉町）、浦富海岸（岩美町）、鳥取砂丘、雨滝、湖山池（鳥取市）等があり、海岸部を中心に古第三紀以降の日本海形成史を観ることができる（写真1）。

また、コウノトリの国内最後の生息地となったコウノトリの郷公園（豊岡市）や、城崎温泉（豊岡市）、湯村温泉、餘部鉄橋（新温泉町）やラッキョウ畑（鳥取市）等、そこでの生態系や人々の暮らしもジオパークの重要なストーリーとなっている（写真2）。エリア区分として山陰海岸では、経が岬～間人、琴引浜～久美浜湾、郷村断層、竹野海岸、円山川、香住海岸、神鍋、但馬御火浦・浜坂、鉢伏、扇の山、浦富海岸、鳥取砂丘の12のエリアを使用している⁴。

1 GGNは、学術的に重要な「大地の遺産」の保全保護と、地球科学教育の普及啓発や観光を通じた地域振興を目的とするジオパークを推進するユネスコ支援のネットワーク組織であり、2004年にスタートした。2010年10月時点で25か国77か所が加盟している。

2 済州島ジオパークはユネスコが推進する自然分野の3つの認定（2002年の生物圏計画、2007年の世界遺産、2010年のジオパーク）を受けている。

3 JGNへの加盟審査やGGN候補地審査は日本ジオパーク委員会が行っている。

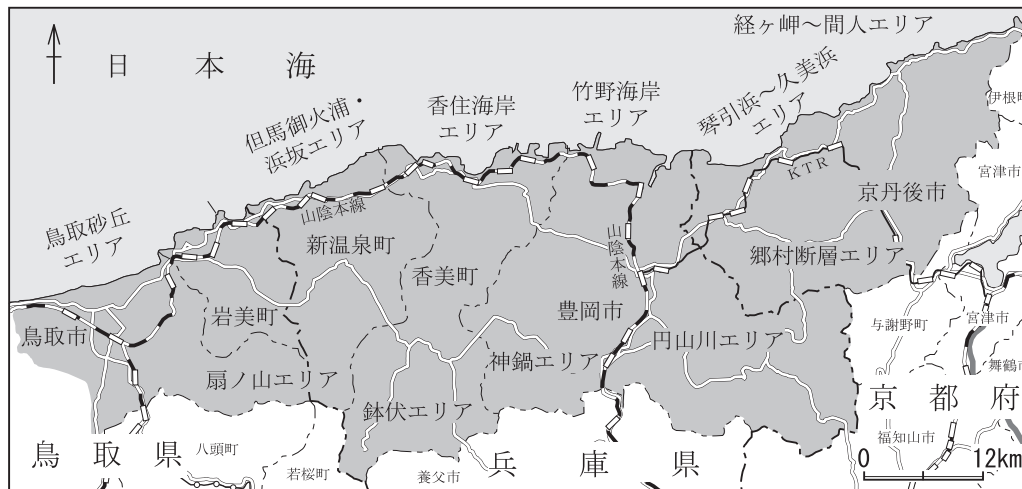
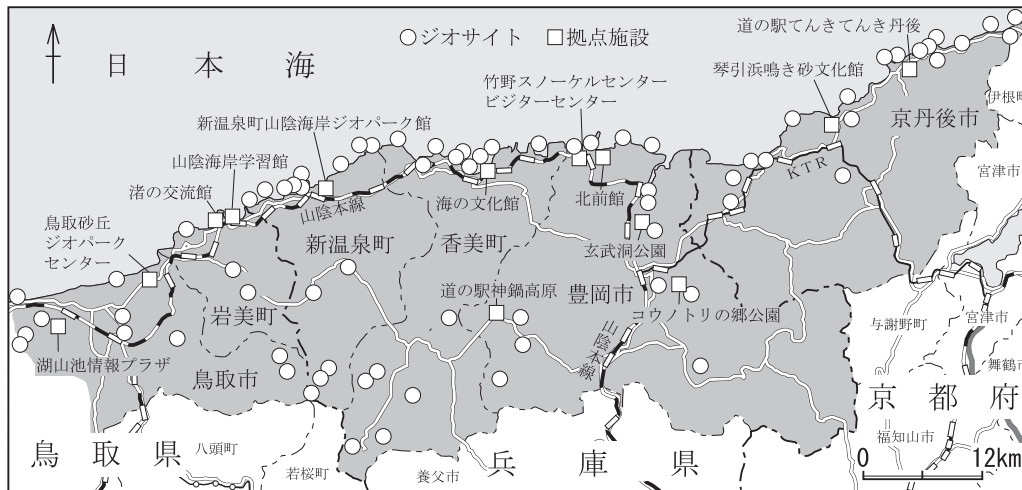


図1 山陰海岸ジオパークの概観（2010年）

（出所：山陰海岸ジオパークパンフレット・ホームページ、現地調査より作成）

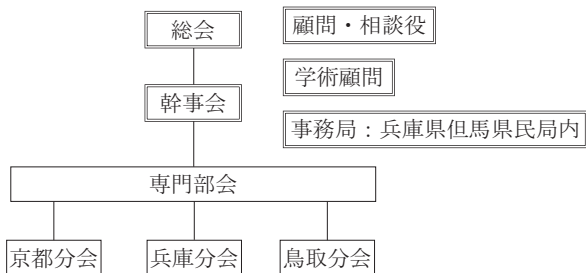


図2 山陰海岸ジオパーク推進協議会の組織図（2010年）

（出所：山陰海岸ジオパーク推進協議会提供資料）

運営体制については、山陰海岸ジオパーク推進協議会を中心とした推進体制が構築されている（図2）。事務局を豊岡市にある但馬県民局に設置、豊岡市長



写真1 立岩（2010年5月新名撮影）

を会長とし、各府県からの出向職員（6名）で構成されている。各地でのイベント情報等はこの事務局へ伝えられ、山陰海岸公式ホームページ等で情報公開している。GGN認定後には11月に開催された

4 もともと、この12のエリアを「ジオエリア」として明確な境界線を引き区分していたが、GGN審査時に指摘を受け、この「ジオエリア」という言葉は使われなくなった。なお、山陰海岸の公式ホームページでは、県境のみがひかれ、市町界やエリアについては明確なラインは引かれていない（閲覧日2011年1月24日）。



写真2 湯村温泉の荒湯（2010年9月新名撮影）

「山陰海岸ジオパーク110kmウォーク」や「ガイド交流会」のように行政界を超えてジオパークを推進していく試みも始まっている。

とはいえ、実際の活動は基礎自治体単位で行われているのが実情である。豊岡市を除く各市町はそれぞれ推進協議会等を設けており、ガイド養成についても6市町、それぞれで開催している。行政、商工団体、ガイド団体等で構成されるのが、京丹後市の京丹後ジオパーク協議会、香美町の香住町ジオパーク推進協議会、新温泉町ジオパークネットワーク、岩美町の浦富海岸ジオエリア協議会、鳥取市の山陰海岸ジオパーク鳥取県連絡協議会である。特筆すべきは、地域住民有志10名でスタートした香美町の香住ファンクラブであろう。なお、拠点施設である海の文化館では、ジオパークに関する展示物の設置やジオカフェなどの各種イベントを開催している（写真3）。



写真3 香美町海の文化館（2010年5月新名撮影）

玄武洞公園では、2009年より国の緊急雇用対策事業で雇用された1年契約の玄武洞案内ガイドが3名いる（写真4）。初年度は女性3名、2010年12月



写真4 玄武洞とガイド（2010年5月新名撮影）

時点では男性3名がいる。ガイド内容は3者3様で、玄武洞や玄武岩についての解説のみならず、同じ玄武岩である立岩との違いや、城崎温泉と玄武洞の関わり、コウノトリについての案内もあり、玄武洞から次のジオサイトへの橋渡しもしている。このほか、山陰海岸ではNPO法人まちづくりセンター丹後支所（京丹後市）、いわみガイドクラブ（岩美町）、とっとりボランティアガイド友の会、いなば国府ガイドクラブ、扇の里グループ（鳥取市）といった団体がジオガイドとして活動している。

山陰海岸の拠点施設には、博物館や体験施設として琴引浜鳴き砂文化館（京丹後市）玄武洞ミュージアム、竹野スノーケルセンター・ビジターセンター、北前館（豊岡市）、海の文化館（香美町）、新温泉町山陰海岸ジオパーク館（新温泉町）、渚の交流館、鳥取県立博物館の分館である山陰海岸学習館（岩美町）、鳥取砂丘ジオパークセンター、湖山池情報プラザ（鳥取市）がある。このうち、新温泉町山陰海岸ジオパーク館と山陰海岸学習館はジオパークに特化した施設であり、山陰海岸学習館には博士号を持つ学芸員が2名常駐している。2011年1月時点において、この2施設に湖山池情報プラザを加えた3施設においては、建物の外壁に山陰海岸のロゴマークが付けられているのが特徴である。

道の駅てんきてんき丹後（京丹後市）、玄武洞ミュージアム、道の駅神鍋高原（豊岡市）では、ジオパーク関連商品の販売や案内看板の設置がみられる。ジオパーク関連商品については、豊岡市のマスコット「玄さん」が最も種類が多く、携帯ストラップやまんじゅう、缶バッジ等多様な商品が展開されてい

る⁵。なお、玄さんは硬いイメージのある玄武洞に親しみを持ってもらうためのキャラクターとして登場した。今では、玄さんを目当てに訪れる観光客もいる⁶。他地域においても、ジオパーク関連商品の開発が見られるが、「玄さん」関連グッズが圧倒的に多く、多種多様な商品開発がなされている。一方で、鳥取砂丘エリアでは、マグネットやストラップといった商品が見られるものの、「玄さん」と比較するとそのバリエーションは乏しいと言わざるを得ない。

活用の面においては、先述の土産物のほかに、海岸地形を海から観察できる遊覧船事業には個人によるもの（京丹後市、新温泉町）と、企業によるもの（山陰松島遊覧、香住遊覧）の4つがある。三姉妹船長の香住遊覧では、ジオパークの解説を中心としたガイドが行われており、山陰松島遊覧はより近くで海蝕地形を観察することができる小型船「うらどめ号」を導入した。山陰松島遊覧では物販や飲食コーナーも設置されており、併設されている飲食店では「ジオ焼」も開発された。各種体験学習施設には、渚の交流館や竹野スノーケリング・ビジターセンターがある。また、網代漁港近くには、2010年6月にスキューバダイビングショップもオープンし、海底地形を楽しむダイビングサービスが始まった。また、鳥取県内には国道9号線沿いを中心に「ジオパークロード」の看板が設置されている。

山陰海岸には、木津温泉（京丹後市）、城崎温泉（豊岡市）、湯村温泉（新温泉町）、いなば温泉郷（岩井温泉、吉岡温泉）といった温泉地や、海岸沿いの民宿群がある。ジオパークとして温泉地全体が積極的に活用されているかといえば、やや消極的な面があると言わざるを得ないが、しかしながら、今後の展開によってはジオパークを活用していく意思があるとする経営者も多い。

例えば、城崎温泉や湯村温泉は、来訪者が温泉地内を徒歩で回遊する構造となっている、城崎温泉には、7つの外湯があり、来訪者は宿を起点に外湯巡

りを楽しんでいる。また、1925（大正14）年に起きた北但馬地震（北但大震災）によって落石した玄武洞の玄武岩を利用し、温泉内を流れる大谿川の護岸工事を行った。これは現在でも残っており、城崎温泉の重要な景観の一部となっている。一方、湯村温泉では、約97度の高温の源泉が毎分470ℓ湧き出ている「荒湯」があり、ここでは温泉たまごやゆで野菜等を楽しむことができる。また、春來川沿いには足湯もあり、この荒湯と足湯を中心として温泉地が形成されている。今後は温泉地における定期的なジオツアーの開催等が待たれるところであろう。

2. 2 世界ジオパークネットワークによる現地審査

山陰海岸は2009年10月28日に、GGN加盟の国内候補地として決定し、同年12月1日にGGN加盟申請書を提出した⁷。2010年4月にマレーシアのランカウィで開催された第4回ユネスコ国際ジオパーク会議にて、書類審査の終了と現地審査に関する通告がなされた。そして、同8月1～4日にイギリス、ギリシャからの審査員2名による現地審査が行われた。

山陰海岸ジオパーク推進協議会の記者発表資料によると、現地審査は鳥取市の鳥取砂丘から始まった。初日の鳥取砂丘では鳥取砂丘ジオパークセンターと砂丘地での視察が行われ、審査員からは学習や保全活動についての質問があった。

2日目は岩美町と新温泉町での視察が行われた。鳥取市から浦富海岸への移動中、福部のラッキョウ畑や、網代漁港でのスルメ作り体験などの視察が行われた。岩美町の浦富海岸では、いわみガイドクラブによる有料ガイドシステムの構築や、対象者によって説明を分けている点が評価された。また、山陰海岸学習館や渚の交流館では、展示内容の充実や学芸員による子供向けプログラムの整備に関心ももたれた。その後、新温泉町に移動し、但馬御火浦の三尾大島、湯村温泉の荒湯での視察が行われた。湯村温泉では宿の女将による英語でのガイドが行われ、そ

5 地元音楽家によってジオパークの楽曲も作成された。

6 玄さんは豊岡市のマスコットキャラクターであるため、山陰海岸の他地域では使用が制限される面もある。

7 山陰海岸におけるジオパークへの取り組み過程については谷本（2009）、新名（2010）に詳しい。

の「ホスピタリティ」が評価された。

審査3日目は新温泉町山陰海岸ジオパーク館、香美町、豊岡市での視察が行われた。遊覧船かすみ丸では、香住海岸の浸食地形や火山岩、柱状節理、日本海形成の初めにできた湖の地層などについて、三姉妹船長のガイドが行われた。香住鶴酒造を視察後、豊岡市へ移動した。豊岡市では神鍋高原、コウノトリ文化館、玄武洞公園での視察が行われた。ここでは、「コウノトリと人との共生」について、中貝会長の英語によるプレゼンテーションが行われ、「エコとジオ」との関係についての質問がなされた。

最終日は京丹後市にて、間人と立岩、大成古墳を視察した。立岩、大成古墳では、NPO法人まちづくりサポートセンター丹後支所の案内により、立岩と地域の歴史や文化との関わりについて説明が行われた。現地視察を終えたのち、豊岡市において意見交換と記者会見が行われた。

記者会見によると、現地審査においてはおおむね好評であり、山陰海岸がジオパークについて理解している点が高く評価された。その一方で、地域間のつながりの弱さが指摘されており、山陰海岸が一体となってジオパークを推進していくことが望まれるとしている。

3. 鳥取市におけるジオパークの新たな取り組み

鳥取市においてもジオパークへの新たな取り組みが始まった。ここでは鳥取市国府町上地の「扇の里グループ」と湖山池情報プラザ、とっとり観光ガイド友の会の活動を報告したい。

3. 1 扇の里グループによるジオツアー

鳥取市国府町上地地区は鳥取市の南東部の扇の山の山麓に位置し、人口132、世帯数51戸、高齢化率55.0%（平成17年度国勢調査より）の上上地、下上地からなる地区である（鳥取県2010）。集落の奥、標高600mあたりに通称「京ヶ原」と言われる棚田景観が広がる。ジオパークにおいては扇ノ山エリア

に該当し、普含寺泥岩層やスコリア、貝殻化石、天然記念物であるハコネサンショウウオが観察できる地域である。

上地地区の扇の里村づくり委員会では、上地集落120人が構成員となり、「天空の村」をキャッチフレーズに、年2回の小中学生対象の農業体験「わじっ子くらぶ」の開催や、プロジェクト京ヶ原⁸、扇の里運営委員会と新扇の里グループによる農産物加工、料理教室などの体験交流会の開催、「菜の花応援隊」「ジオパーク探検隊」などが行われてきた。

この中で新扇の里グループ（以下、扇の里グループ）を中心に、農業体験等を通じた地域振興に取り組んできた。開催回数通算22回を数える「わじっ子くらぶ」では、初夏に大根の種まきや笹巻づくり、カエルを捕まえてそのジャンプ距離を競う「かえるんぴっく」や、秋に大根の収穫や魚のつかみ取り体験などが行われている。また、後述の成器鉦山跡地では岩石観察会なども行われており、山陰海岸がジオパークに取り組む以前からジオツーリズムにも取り組んできた地域である。山陰海岸ジオパークがスタートしてからも、専門家を交えた勉強会が開かれている。

2010年度に開催された「わじっ子くらぶ—ジオパーク探検隊おためし編—」は、唐戸大滝への登山コースと、渓谷散策コースの2コースで行われた。雨天時のことも考慮し、鳥取県立博物館の学芸員の指導の下、化石のレプリカ作りの準備を行った。

当日の7月25日は快晴となり、当初の計画通り、屋外で開催された。参加費は大人1500円、子供1000円であった。参加者はまず博物館の学芸員から扇ノ山の噴火で噴出したスコリア層やその上に堆積した安山岩溶岩の露頭の解説を受け、それらを観察しながら、扇の里グループの案内で溪流散策や唐戸大滝への登山を行った。溪流散策コースでは天然記念物のハコネサンショウウオの観察も行われた（写真5）。ツアー後、同グループの女性が地元食材を使った山菜のてんぷらや素麺、カレー、スイカなどの昼食を提供した。参加者の反応は非常に良好で

8 プロジェクト京ヶ原では、ボランティアによる水路掃除、草刈り等の京ヶ原水路の保全活動や酒米栽培、清酒「京ヶ原」の委託製造販売を行っている。



写真5 わじっくらぶジオパーク探検隊おためし編一でのハコネサンショウウオ観察の様子 (2010年7月新名撮影)



写真6 成器鉱山の廃石 (2010年12月新名撮影)

あるものの、山歩きの際の安全確保や駐車場やトイレ設置など、今後継続していくうえでの課題も明らかとなった。

今後のジオパークでの活用では、鉱山跡地の活用が考えられる。扇の里グループの活動拠点である上地には、昭和13年から18年まで操業していた金鉱山の成器鉱山⁹の跡地が存在する(写真6)。現在では、廃石置き場や一部山道、建物やコンクリート跡が残るのみである。坑道は、入り口がコンクリートでふさがれ、その内部を見学することは困難である。廃石置き場では閃亜鉛鉱、方鉛鉱、黄銅鉱、水晶が観察可能であり、時に観察に訪れる人もいるという。

成器鉱山の記録は藩政時代の「因幡誌」に「上地二金出ル」、「新田金山間歩」といった記述があるのが最も古いが、本格的な採掘が始まったのは昭和13年である(山名1998)。中学生向け巡検用副読本である鳥取理学会編著(1942)によると、岩美郡

成器村字上地に旧藩時代金山として採掘されていたものを、昭和11年に森鉱業所によって試削が開始され、昭和13年より本式の採掘にかかったとされる。

ここで採掘した金は、馬車にて鳥取駅へ運ばれ、直島精錬所へと送られた。しかしながら、昭和18年、太平洋戦争激化のため国の方針で採掘を中止することとなった。当時の暮らしについての聞き取り調査では、昭和11年に成器村上地で集落が全焼する火災があったことや、鉱山の倉庫で映画「支那の夜」が上映されたこと等が明らかになってきている。成器鉱山に関する資料はあまり残されておらず、鉱山があったことはわかっているが、そこでの採掘の状況や暮らしぶりについては、いまだ解明されていない点が多々残されている。このジオパークへの取り組みを通じて、成器鉱山に再び焦点を当てることにより、地域史の解明にも貢献できるものと考えられる。また、この扇の里グループは、山陰海岸ジオパークにおける内陸部活用の事例としてだけでなく、中山間地域における事例としても注目すべき取り組みであろう。

3.2 湖山池情報プラザにおけるジオ拠点開発

鳥取市には湖山砂丘の発達によって、室町期に日本海と分離したとされる湖山池がある。この湖山砂丘は鳥取砂丘の中でも比較的早くから開発され都市化が進展した地域であり、戦後急速な土地利用の変化を経験している。人々の暮らしも都市化の影響を受け、昭和30年代ごろまでは泳ぐことができた池の水環境も、都市化により悪化したとされる。なお、湖山池は「池」とつく湖沼の中では、日本最大である。

湖山池およびその周辺には、湖山池固有の漁法であり鳥取市の無形民俗文化財に登録されている石がま漁¹⁰(写真7)、山名氏の居城であった天神城跡、戦国時代末期の山城跡である防己尾城跡、白鷺が発見した秘湯とされる吉岡温泉、鳥取の民芸運動の父・

9 上地鉱山と呼ばれることもある。なお、同鉱山跡地入口には「上地鉱山入口」の看板が設置された。

10 湖山池独特の石がま漁は、湖山池の特性と在来種のフナの習性を巧みに利用した漁法である(西田・田中・星見1997)。ただし、その成立については不明な点も数多く残されている(田中1982)。



写真7 使われなくなった石がま
(2010年5月新名撮影)

吉田璋也が建てた阿弥陀堂などで数多くの「地域資源」がある。とはいえ、鳥取市内において湖山池は「市民の憩いの場・レクリエーションの場」としての性格が強く、青島を一周する散策路での散歩や野鳥観察、湖上スポーツなどに利用されている。

この湖山池では、鳥取市高住の青島大橋の入り口に立地する湖山池情報プラザを拠点として、2010年5月よりジオパークへの取り組みを始めた(写真8)。もともとここは鳥取市の湖山池公園管理事務所であったが、「ひょうたん島実行委員会」が事務所を有効活用したいと検討を重ねた結果、指定管理者として管理することとなり、同時に、県と市の協力の下、ふるさと雇用再生特別基金事業を活用して年間480万円の交付金を受けるようになった。

これにより、鳥取県環境アドバイザーで環境学習



写真8 湖山池情報プラザ (2010年12月新名撮影)

の講師として活動しているアドバイザーが常駐し、湖山池の情報発信や各種イベントの運営などを行うようになった¹¹。さらに、同年7月には人員を拡充し、現在2名のスタッフが常駐している。湖山池情報プラザ内にはアドバイザーが作成した湖山池に関するジオパネルが設置され、それまで倉庫に保管されていた青島のジオラマや、小学生が夏の課題で作成した石がま漁の模型も展示されるようになった¹²。

2010年の夏季休業中には、小学生を対象とした「びっくりひょうたん島」や「湖山池ジオパーク発見ツアー」が行われた。これらイベント開催期の7・8月における湖山池情報プラザ利用者数は2635名であった。

「湖山池ジオパーク発見ツアー」では座学、野外巡検、体験学習を行った(写真9)。座学では湖山池の成立や石がま漁等について解説し、野外巡検では小型船を利用してアドバイザーの解説の下、青島、津生島、団子島、猫島を周遊した。体験学習では、土器づくり、勾玉づくり、火おこしといった古代体験を行った。これは、湖山池周辺に多数位置する遺跡や古墳に由来するものである。



写真9 湖山池ジオパーク発見ツアーの様子
(2010年8月草刈撮影)

小学生の参加が中心であるものの、小学生以下の親子連れも多い。湖山池は「湖山砂丘の発達により日本海と分離した瀉湖」であるが、民話「湖山長者」の方が子供を中心に親しまれているようである。この「湖山長者」も昔の人の自然観や人生訓話を伝え

11 湖山池情報プラザのアドバイザーの指導の下、湖山池周辺の小学校では、湖山池の葦を使って手すき和紙の卒業証書を作っている。

12 現在、パネルは日本語と英語の2言語がある。作成当たっては、アドバイザーが作成した日本語版を翻訳し、鳥取市職員(国際交流員)にネイティブチェックをしてもらい完成した。このような多言語展開も、今後の課題となろう。

る貴重な手がかりであり、鳥取の子供であれば誰でも知っている物語である。こういった民話の活用も模索しているところである。

2011年1月23日、シンポジウム「湖山池もジオパークだ」は、午前の学習会と午後のシンポジウムの2部構成で開催された。午前の学習会では湖山池を長年研究している星見清晴先生による「湖山池と人々の暮らし」についての講演があり、その後、鳥取砂丘に関する映画の上映が行われた。昼食時には、湖山池の食文化を紹介する目的で湖山池の特産物を用いた昼食（湖山池産のフナと自家製味噌を用いた味噌汁、湖山池産長者米に湖山池北西岸に位置する三津産のさつまいもを炊き込んだおにぎり、漬物）が提供された。

午後のシンポジウム（参加者約80人）では、鳥取大学名誉教授の赤木三郎先生による基調講演「湖山池とジオパーク」、筆者による研究報告「ジオパークの楽しみ方」、「湖山池ジオ俳句コンテスト」の表彰式、有識者によるパネルディスカッションが行われた。「湖山池の部」、「ジオパークの部」の2部門からなる「湖山池ジオ俳句コンテスト」では、山陰海岸のみならず洞爺湖有珠山から島原半島まで日本全国から約1,400句の応募があった。鳥取俳句協会顧問の岸本砂郷先生（湖山池の部）と日本ジオパーク委員会委員長の尾池和夫先生（ジオパークの部）の審査の下、大賞、入選、佳作が決まり、シンポジウム内で表彰式を行い、賞状と副賞が授与された。

賞には山陰海岸（玄さんのがんこサブレ、玄さんバッジ）、アポイ岳（携帯ストラップ）、洞爺湖有珠山（携帯ストラップ、ジオパークキャンディ）、糸魚川（ジオロボクッキー、ジオバック）、島原半島（携帯ストラップ、文具、雲仙焙煎珈琲）など、各地のジオパークグッズを採用し、同時に日本国内のジオパークのPRも行った。

パネルディスカッションでは、湖山池に関する小学生からの質問に答える形で進行し、湖山池におけるジオパーク活用の可能性について議論された。また、休憩時には「湖山池三津イモクッキー」がふる

まわれ、湖山池の味覚を紹介した。2011年2月にはポットホールも発見され、ますます盛り上がりを見せている。今後は他地域のジオサイトやジオパークとの連携を模索しながら、地域を巻き込んだジオ活用の一層の充実を図っていかなくてはならないであろう。

3.3 とっとり観光ガイド友の会の活動

とっとり観光ガイド友の会は2001年に設立され、2006年より鳥取城跡・仁風閣を中心に本格的な活動がはじまった。翌年からは毎週日曜日に鳥取城跡に常設テントを設置し、2009年には現在の小屋が完成した。また、2009年からは鳥取砂丘へ来た観光客を鳥取県東部地域へ誘導する現場を作ろうと、因幡交流連絡会を発足した。この因幡交流連絡会は、東部一円のガイド組織とガイドの交流を目的としており、鳥取県東部の10団体が月1回のペースで打合せを行っている。

とっとり観光ガイド友の会では主に3つのガイドコースがあり、その内ジオコースには砂丘散策コースがある¹³。砂丘散策コースは90分であり、ガイド料は250円/人となっている。個人客だけでなく旅行代理店からの依頼もあり、徐々に利用が増えてきている。なお、ガイドの利用件数については、2009年度には年間30件程度であったが、2010年には100件以上の利用があり、来年はさらに増加する見込みである。

このガイド友の会に所属しているガイドは18人おり、40-50歳代が中心となっている。毎年3月にガイド養成講座を開講し、その受講生がガイドとして活動している。ガイド養成講座受講後は、随時勉強会を開き、ガイドのスキルアップを図っている。今後は、鳥取県東部一円の魅力を観光客へ伝え、各地へと誘導する予定である。この視点は重要であり、ジオパークにおいても、ジオパーク一円の魅力を観光客へ伝え、各地へ誘導するシステム構築を考えていかなくてはならないであろう。

13 とっとり観光ガイド友の会のガイドコースには砂丘散策コースのほかに、鳥取城址コース、食べ歩きコースがある。

4. おわりに

本年度は山陰海岸がGGNに加盟された記念すべき年であり、また新たなスタートの年でもある。4年に1度の継続審査もあることから、「持続的発展可能な」ジオパークの形成を目指して、今後も引き続きジオパークへの取り組みを進めていかななくてはならない。

その中でも、GGN審査時にも指摘された山陰海岸ジオパーク全体の一体感の形成が重要なものとなる。現在のところ、各自治体の活動が中心であり、横の連携が十分に取れているとは言い難い。とはいえ、玄武洞でのガイドには立岩の話も取り入れられており、徐々にではあるが、横のストーリーも語られ始められている。こういった山陰海岸を横断するストーリーを語ることも、今後のガイド養成の現場において進める必要があるだろう。それと同時に「ガイド交流会」や因幡交流連絡会のように、ガイド組織が相互交流を深め、観光客をジオパーク一円に誘導するシステムを形成していく必要があると考えられる。

GGN認定までは、認定が第1の目標であった。その目標をクリアした今、各地で様々なジオパークのイベントや活用が行われ、海岸部のみならず内陸部でも徐々にその活用が始まり、多様性を持ったジオパークが形成されつつある。しかしながら、新たにジオパークを地域振興に取り入れていこうとする地域では、自地域が日本海形成史の中のどこ部分に位置づけられるのか、既存活動がジオパークの中でどのように関係していくのか、といったことで悩む場合が多くみられる。その時、地域の「頭脳」となる専門家の存在は非常に重要であり、多様な専門家と地域に密接な連携がジオパークの多様性や持続性を持たせる鍵となるであろう。

《参考文献》

山陰海岸ジオパークホームページ <http://sanin-geo.jp/> (最終閲覧日2011年1月24日)。

田中善蔵 1982. 湖山池の石がま漁について, 鳥取大学教養部紀要16: 7-36.

谷本 勇 2009. 但馬海岸の地形・地質, 『鳥取文芸』 31: 12-16.

鳥取県 2010. 『平成22年度改訂版中山間地域における地域の宝・地域力実例集』 蛍光社.

鳥取理学会編著 1942. 『鳥取地方校外指導便覧』 鳥取市教育會.

新名阿津子 2010. ジオパークに関する調査報告—山陰海岸ジオパークの世界ジオパークネットワーク加盟に向けて—. 『TORCレポート』 33: 85-103.

西田良平・星見清晴・田中善蔵 1997. ぐるりと湖山池, 赤木三郎編著 『日曜の地学23鳥取の自然をたずねて』 築地書館: 23-32.

山名 巖 1998. 鳥取県における鉱山の情報—終戦前後の動向—. 鳥取地学会誌 2: 29-53.